

## 中島義雄氏ヒアリングの趣旨

中島義雄氏は66年に旧大蔵省に入省した「花の41年組」であり、武藤敏郎氏、長野庵士氏らとともに「(昭和)41年四天王」のひとつと言われた。主に主計畑を歩んだが、91年6月、主計局総務課長から海部首相の秘書官に就任、同年11月の宮澤内閣発足後も93年6月まで秘書官として留任した。

4人いる首相秘書官の中でも、大蔵省出身者は筆頭格であり、首相の個人的相談相手となることも多い。特に中島氏の場合、宮澤首相が同じ大蔵省出身だったこともあり、首相も中島氏を信頼し、中島氏は「首相の知恵袋」役として、重要政策の意思決定に立ち会うことも多かった。中島氏は首相と最も身近に接し、その考えを熟知する立場にあった。

バブル崩壊後の株価急落局面において、中島氏は宮澤首相と大蔵省との間のパイプ役として奔走した。中でも、92年8月17日、東京証券取引所の緊急閉鎖と公的資金の投入も辞さないと伝えられた首相を静養先の軽井沢に訪ね、必死の説得で思いとどまらせたエピソードは今も語り草になっている。中島氏は首相を説得する一方、大蔵省にも首相の強い危機意識を伝え、これが翌18日の「金融行政の当面の運営方針」発表へとつながったが、その後、首相は引き続き公的資金活用を模索するものの、孤立し、断念に追い込まれていく。

当時、公的資金導入を見送ったことが、後に日本が長くバブル後遺症に悩まされる一因とされた。導入を断念する過程で何があった

のか。一連のエピソードをめぐる生々しい真実・裏側を、当事者として間近で目撃した中島氏に証言していただく。

# 中島義雄氏略歴

		中島義雄氏年譜	関連出来事年表
1966年(昭和41年)	東京大学法学部卒業、大蔵省入省、主計局総務課配属		
1971年(昭和46年)	新潟県三条税務署長		
1972年(昭和47年)	国税庁査察課課長補佐		
1973年(昭和48年)	銀行局特別金融課課長補佐		
1975年(昭和50年)	大臣官房秘書課兼文書課課長補佐		
1976年(昭和51年)	主計局主査(厚生係担当)		
1979年(昭和54年)	主計局総務課長補佐		
1981年(昭和56年)	大臣官房秘書課企画官、主計局主計企画官(財政計画担当)		
1985年(昭和60年)	主計局主計官(厚生・労働担当)	9月―蔵相・中央銀行総裁会議(G5)ニューヨークにて開催。ドル高是正の経済政策協調推進で一致(プラザ合意)	
1986年(昭和61年)		9月―経済対策閣僚会議、総合経済対策を決定(内需中心の景気拡大・雇用の安定などにより、経済の拡大均衡をめざす)(約3兆6000億円)	
1987年(昭和62年)		2月―主要国蔵相・中央銀行総裁会議パリにて開催。黒字国の内需拡大(低金利政策)、為替レートの現水準での安定化を確認(ルール合意)。2月―公定歩合引き下げ(3・0%↓2・5%・89年5月まで)。5月―経済対策閣僚会議、緊急経済対策を決定(約6兆円)。10月―大暴落(ブラック・マンデー)	
1988年(昭和63年)	主計局総務課担当主計官	7月―BIS中央銀行総裁会議・バーゼル銀行監督委員会「銀行の自己資本比率の国際的統一基準」を決定	

		中島義雄氏年譜	関連出来事年表
1989年(平成元年)	主計局総務課長	5月―公定歩合引き上げ(2・5%・87年2月より2年3カ月↓3・25%)	
1990年(平成2年)		3月―金融機関の土地関連融資の総量規制を示達	
1991年(平成3年)	首相秘書官事務取扱、内閣総理大臣秘書官(海部内閣・宮澤内閣)	5月―地価税法公布・一部施行。12月―景気減速・地価急落に対処し金融機関の不動産融資の総量規制の解除決定	
1992年(平成4年)		6月―金融制度改革法成立。8月―「金融行政の当面の運営方針」12項目を発表。8月―総合経済対策 総額10兆7000億円	
1993年(平成5年)	主計局次長	4月―新総合経済対策決定 総額13兆2000億円	
1994年(平成6年)		2月―総合経済対策を決定 15兆2000億円。2月―「金融機関の不良債権問題についての行政上の指針」を発表	
1995年(平成7年)	財政金融研究所長にて退官	1月―阪神・淡路大震災。3月―東京共同銀行が営業開始。6月―「金融システムの機能回復について」を発表。12月―6850億円の財政資金投入を含む住専処理法案決定	
1996年(平成8年)		6月―住専処理法など金融6法成立。11月―橋本総理「日本版ビッグバン」を指示	
1997年(平成9年)		7月―アジア通貨危機。11月―三洋証券会社更生法の適用を申請。北海道拓殖銀行が北洋銀行への営業権譲渡を発表。山一證券大蔵省に自主廃業を申請	
1998年(平成10年)		10月―日本長期信用銀行の特別公的管理を決定、初の民間銀行国有化。12月―日本債券信用銀行も国有化	
1999年(平成11年)		3月―金融再生委員会が大手15行の経営健全化計画を承認(7兆4592億円の資本注入)	

## 第2部 オールラヒストリーインタビュー⑦

中島 義雄 氏（元大蔵省財政金融研究所所長）

日時 2010年3月12日(金) 14時5分～15時50分  
場所 セラー万年筆株式会社 会議室

### 休暇中の宮澤総理と中島秘書官（1992年8月）

【竹中】 早速ですが、一番お伺いしたい質問から、ずばりと質問させていただければと思います。99年から00年にかけて日本経済新聞社がバブルの検証特集を組みました。

【中島】 ええ、そうでしたね。

【竹中】 その冒頭を飾ったのが、宮澤（喜一）元総理が僕には実は秘策があったという話でした。当時「金融行政の当面の運営方針」が92年8月18日（19日は新聞掲載日）に発表されました。これは、寺村（信行）銀行局長の下、銀行局が用意していたものでした。その準備をしているときに、こういう紙を発表する以上は総理の了承が必要だということで、中島秘書官が当時軽井沢で休暇中の宮澤総理のところへ駆けつけました。当時の問題は、株価が1万5000円になり、1万4000円になり、下落が止まらないということでした。総理自身も危機感を持っていたし、銀行局も危機感を持っていました。当時は不良債権の問題もそろそろ言われ始めていた頃だったので、「金融行政の当面の運営方針」というものをまとめて発表するわけですが、総理は総理でそれとは別のかたちで株価の下落に対して非常な危機感を覚えておられたということですよ。

それで中島秘書官が軽井沢にいらしたときに、これは非常に危ないとおっしゃって、ここをそのままクオートすると、「猛烈に危ない。必要なら東京へ戻り、株式市場を閉めてもらう」とおっしゃったと言われています。（『犯意なき過ち第1回・宮沢喜一の15年』1999年12月27日、日本経済新聞朝刊）

そのときの総理のお考えは、公的資金を投入するということでした。どうやって使うのかというのはどう考えていたのか、その話もわかる範囲でお伺いしたいのですが、今言われているのは、公的資金を何らかのかたちで入れるということです。この公的資金が、日銀資金なのか、財投なのか、税金なのかというのはちよつとはつきりませんが、公的資金を使ってこの金融不安に対応することを考えている。いきなりそういうことをするためには、国民に危機的状況であることを知らせる必要がある。そのメッセージを発する方法としては東証を閉めるのが一番良いのではないかと考えられていたとのことですよ。

実際にこういう発言を秘書官である中島様になされたのでしょうか。

【中島】 今みたいにまとめておっしゃったわけではないですが、日経から出されている書物や新聞で特集があった折、私も多少取材を受けたこともありまして、細かいところは別としましておおむね正しいですね。ただ「必要なら東京に戻る」と総理が言われたのは私が軽井沢に駆けつける直前だったと記憶しています。

私もそのときは非常に緊張感を持っていましたから、当時のそういう場面場面はよく覚えていきます。ともかく株価がどんどん下がってきて、要するに不良債権が大きくなっていることについて、当時

は総理が一番危機意識を持っておられたと思います。

大蔵省は事態の深刻さを知っていたはずですが、そのうち株価は回復するだろうと思っていたことと、何よりも市場に、特に株式市場に公的な関与をすることは避けるべきだというオーソドックスな正論を堅持していました。そういうこともあって、危機からあえて目をそらすようにしていたのかもしれませんが。

ところが、よく引用されているように、フィナンシャルタイムズが書いた、日本の不良債権はこんなものじゃない、50兆兆あるよ、というようなことを総理はいち早く読んでおられるわけです。これがほかの総理と違うところです。いつも自分でそういう横文字の雑誌、新聞を読んでいるので、我々秘書官はもちろん、大蔵省の担当官よりも、そういうことについての情報が早いという面もあったと思います。大蔵省がそのときそれを知っていたのかどうか私は確認していませんが、いずれにしても危機意識の持ち方は大変なものでした。

特に宮澤総理は景気に対してものすごく神経を使われる方で、よくケインジアンとも言われますが、景気を支えることが一番大事なことでと確信しておられました。このことに限らずいろいろなときでも、とにかく減税、公共投資など、景気刺激については非常に熱心な方でした。大蔵省はどちらかというと財政の健全化を狙っていますから、総理のそういう姿勢に対してはいつも警戒的なスタンスでいたことは事実です。大蔵省はそういう財政資金を入れることに対して警戒的であったために、危機の深刻さを軽く見過ぎていたくらいはあったと思いますね、今考えると。

私自身は、総理はフィナンシャルタイムズのこと当然言及され

ていたし、この株価の下落は大変だ、手を打たなければいけない、と言われたことも何度か耳にしていましたから、その危機意識は秘書官の務めとしてももちろん大蔵省にも伝達していました。しかし、大蔵省は、とんでもない、株式市場に公的な金を入れるというようなことはあってはならないことなので、それは絶対に説得してやめてもらう必要がある、とめる、ということでした。

だから私はまさに、総理自身もおっしゃっているように、完全な板挟み状態でした。私自身がどういう気持ちだったかといいますと、私も長いあいだ大蔵省で財政をあくまでしてきましたから、財政資金という公的な資金を入れるというのは、いかなる格好にせよできるだけ避けるべきだというのが基本的な考えでした。

ところが宮澤総理と間近に接していますと、持っていらつしやる危機意識が本当に鋭いものだったし、真剣なものでしたから、当時、大蔵省が総理をなだめるというか説得する言葉として、「まず銀行の自主努力が先決だ」とか、「市場というのはなるべく自由にするものであって、公的なコントロールはできるだけ避けるべきだ」というような、言ってみれば正論ではあっても薄っぺらな議論だけでは、到底説得できないと思いました。

結局、理論的にはとても総理を説得できないと私も感じまして、これは大蔵省の言い方でもあったのですが、総理がおっしゃるように休みを返上して東京に舞い戻るとか市場を閉めるとかということになれば、不安感が市場に満ち溢れて大変な混乱が起る。かえってマイナスになりますよ、というような、何とつかあまり理論的ではない、そういう情緒的な問題を繰り返していました。私もそれ以上のことと言えなかったのは自分自身情けないと思いました

けれど、とにもかくにも私は大蔵省から派遣されてきた秘書官でもあり、総理にそこで思いとどまってもらうことが正しいと私も思っていたんです。

ところが、総理は簡単には首を縦にお振りにならない。当然です。それで、「いや、今はそんなものではない。大変危ない時期なので、ここは前例とか何かではなく、思い切った手を打たなきゃいけないのではないかな」というようなことは繰り返しておつしやいました。総理と向かい合ってどれぐらいだったのか、ずいぶん長い時間が経ったように思いますけれど、実際には2〜3時間ぐらいやりとりして、結局、私は「大蔵省として最大限のメニューでとにかく対応策を検討しています。明日にでも出しますから、1回それを見てください」ということで、とにもかくにもそこでご理解いただいたということです。

### 「金融行政の当面の運営方針」完成までの経緯

【中島】 実をいいますと、前々から大蔵省がその紙を完璧な形で用意していたのかというと、そうでもなくて、私が東京を出たときは形はもちろん整っていましたが、内容的にはまだ多少の修正を入れる余地を残した未完成品でした。当時は携帯なんかありませんでしたからね。自動車電話はありましたが、それも軽井沢に入ると途絶えてしまいます。軽井沢へ行くまでの間ずっと大蔵省の現場と議論をして、ここの表現をどうするか、こういう項目を盛り込むか、ということをごく強い意向を受けて、さらになお盛り込むものはない

かということ、帰りもまたそういうことをやり続けて、朝でき上がったんです。ですから、あの紙が初めから寺村銀行局長のところ で完全な形で出来上っていたわけではないんですね。

【竹中】 それで今ちよつと怪訝な顔をされたんですね。

【中島】 そうです。大蔵省の盛り込もうとしているものについて、私は少しでも早く宮澤総理にお伝えしなければいけない責務がありますから、少しでも正確に、かつ、詳細に理解する必要がありますから、行きも帰りも車の中はずっと電話していったんです。

そのときに、寺村さんは銀行局長ですから、寺村さんがもちろん中心でしたが、証券の対策もありましたから、寺村さんだけじゃないんです。官房長とか、それから当時の総務審議官はたしか日高（壮平）さんでした。日高さんはご承知のように宮澤大蔵大臣当 時の秘書官です。ですから、総理の基本的なお考えや性質については多少ご理解がある。だから、私が板挟みの状況になっていることのご理解も日高さんが一番あったわけですね。

だから、電話した相手は、官房長の篠沢（恭助）さんだったり寺村さんだったり日高さんだったりしましたけれど、電話の時間としては日高さんが一番長かったかもしれない。そんなかたちでやっています。我々も総理の手前、総理の強い思いをなんとか思いとどまっていたいた以上は、この対策の効果がなければ大変だな、どうしようか、というぐらいの必死の思いでした。だから、私ももちろんでしたけれど、大蔵省の担当者も徹夜でいろいろな準備をしました。

その翌日は、幸か不幸か株価が反転したんです。今考えますと、それがよかったかどうかなんですがね。総理は、この対策の効果が

あったように見えて、株価が上がっていったことについて本心からは納得しておられなかったと思います。不良債権はこんなものじゃないという危機意識は依然としてあった。それが8月末の軽井沢セミナーでの発言になったんですね。

ですから、私は理論的に総理を十分説得できたとは思っていません。そのとき思いとどまってもらうこと、要するに大蔵省の空気を必死にお伝えすることはできたと思う。ただ、総理も、後でいろいろなお話でおっしゃっていますように、大蔵省だけでなく金融界も財界もそこまでの危機意識は持っていなかったし、ましてや、市場に公的資金を入れることについてもすごく否定的な空気だということ、痛いほどわかっていらした。だから、結局そのあとは、これは仕方がなかったのかなと思われたのだと思います。

## 「公的資金」の示すもの

【原田】 確認ですが、そのときの公的資金を入れるというのは、後からかもしれないですが、銀行に資本注入すると解釈されている方が多いように思います。当時の宮澤総理のお考えでは、東証、株式市場に入れるということだったのでしょうか。

【中島】 いや、東証に金を入れるということではなくてね。市場に入れるという意味は、例えば金融機関の不良貸付になっている担保を財投資金か何かで買い上げるとか、あるいは、金融機関が危なければ日銀の金を入れるとか、いろいろな方法があると思いますが、これという特定の具体的なお考えではなかったです。いよいよとなれば、財投で株を買うことまで選択肢の中に考えておられたらと思

ます。それはとんでもないこと、難しいことなんですけれどもね。

【原田】 銀行に資本注入するよりも、株価を支えることで危機を終わらせたい、というお考えだったということでしょうか。

【中島】 そのときは、そうだったと思います。その方法としては株を直接買うということもあったでしょうけれど、まずは銀行の不良債権を軽減してあげるといこと。

【原田】 不良債権を買うということですか。

【中島】 不良債権を買うとか、担保不動産を買うとか、いろいろな方法が念頭におありだったと思いますが、「こういう方法があるじゃないか」みたいな、そこまでの具体的なご指示はなかったですね。

【竹中】 そのとき中島秘書官が軽井沢に行かれたのは、この「金融行政の当面の運営方針」について説明に行くことが目的だったのでしょうか。

【中島】 もちろんそうです。ですから、最終案ではなかったけれど、ほぼ完成に近い骨格がほとんどできていて、「今、これを肉付けしております」ということで持っていました。

【竹中】 それに対して総理が、「いや、私が東京に戻る」とおっしゃったわけですか。

【中島】 いや、そうじゃないですね。もともと「戻る」というのが先ですよ。総理から「このまま何も手を打たないなら戻らないのかん」と。そういうような話が来たので、私が急遽飛んで行ったんです。そう思います、私は。市場を閉めるとか、戻るといいたぐいの話が総理のご意向であるやに聞いて、とにかくすつ飛んでいくことになったんですね。この紙を見て、「これじゃダメだ、俺が戻る」

ということではない。

とにかく市場を閉めるというような、そこまでのことを発想する人は当時どこにもいなかったんです。だからみんなびっくり仰天したわけ。確かに株はどんどん下がっていて危機的ではあるけれど、市場を閉めるなどというのは大変な金融恐慌みたいなとき以外はなわけだから、みんな、ワツと思ったですね。これは大変だ。とにかく総理を説得しなければいけない。とにかくできるだけの政策を総動員しようということで行ったんです。

### 宮澤総理の危機意識

【竹中】 市場を閉めるというご指示の第一声は、どなたに発せられたんですか。

【中島】 そこをよく覚えていないんですけど、そうですね、うーん。大蔵省に伝えられたか、私が最初に聞いたか、ちよつと不確かですね。あるいは日銀の三重野（康総裁）さんは多少聞いていたかも知れませんが市場を閉めるということまで言われたかどうか。

【竹中】 金融を担当されていた上の方の「閉める話を聞いていますか」と聞くと、「いいえ」と答えられる方が多いんですね。官房筋に言ったということでしょうか。

【中島】 いやいや、それはいいですね。だからやっぱり大蔵省では私だったかもしれない。それで、それを総務審議官に伝えて、それから対策に行ったということでしょうね。今、日高さんが他界されたので残念です。彼がいればもつとわかったかもしれない。いずれにしても、市場閉鎖ということが、当時、総理の頭を一瞬よぎった

ことは間違いないですね。

【竹中】 総理は、市場を閉めて、そのあとに何か発表するということも考えていたのでしょうか。とりあえず閉めるから、そのあとの方策は大蔵省が考えてください、ということでしょうか。

【中島】 いや、閉めて、もちろん緊急に対策を打ち出して、それであつと市場の心理を安定させてから開けばいいじゃないか、ということですね。そこまでの発想を、大蔵の金融当局は誰も持たなかった。市場を閉めるなんて、そんな事態だとは誰も思わなかったんですね。だから、総理の危機意識と大蔵省の持っていた危機意識とは、やっぱり非常に大きな差があつたと思います。

【竹中】 その認識の違いに一番苦労されていたのは中島秘書官だった、と西野（智彦時事通信記者、現在はTBSテレビ報道局プロデューサー）さんの本に書かれています。（『検証経済暗雲』2003年7月、岩波書店）

【中島】 （笑）私自身も多少大蔵省サイドの発想だったんです、主計局の出身でしたから。そうでありながら、総理の真剣なお考えや何かを面と向かつて拝見すると、こんな薄つべらでなまじつかな理屈で総理を説得できるかなという気持ちはあつたんです。ただ、総理が最終的にそういうことをなさらなかったのは、大蔵の意見だけでなく、残念ながらとにかく政財界、金融界の誰一人支持しなかった。少なくとも正式には。市場閉鎖はもちろん、公的資金投入についてもですね。それで、急にやっても無理だと思われたのだと思う。

ただし、総理は心の底からそういうふうになつて納得されたのではないということが、軽井沢セミナーでも出たんですね。ですから、総理

を十分説得できなかつたということ、私も大蔵省からちよつと責められました(笑)。しかし、私は精一杯やったつもりだつたし、それよりも、総理の経済運営にかけるそういう真剣な思いを逆に大蔵省に伝えたい。秘書官としてはそういう気持ちでした。

【原田】 また一方で、総理がどれほど真剣だつたのかということについて疑いを持っておられる方もいらつしやいますね。

【中島】 私は、決してなまじつかな話じゃなかつたと思うんです、軽井沢でおつしやつたことは、事前に誰にも全然言わずにいきなり言つてしまうというのは、かなりのことですから。ただ、あの方は、割り切りが早いというか何というか、株がずうつと戻つていつたからまあしようがなかつたのかなというような感じで、結局いつたん諦めたのだと思います。だから、もともとそんなに真剣じゃなかつたのではないか、と言う人がいてもおかしくはない。だけど私はそうは思わない。

【竹中】 では逆に、大蔵省というか中島秘書官がそこで説得しなければ、彼は東京に帰つて東証を閉めたでしょうか。

【中島】 どうでしょうか。それはもう大蔵省が大騒動だつたでしょうね。幹部が全部出て行つて、「総理、お待ちを」となつたと思うけども。

【竹中】 非常に穿つた見方をされる方は、そのようにとめるだろうということまで予想して……。それはちよつとひど過ぎる見方かなと思います。

【中島】 そんなことはあり得ない。あの方はそんなことをする人じゃない。

【原田】 ただ、閉めるとすれば、閉めたあとによほど大胆な手を打

つと言わないとかえつて混乱します。

【中島】 それは、株価を支えるために政府はあらゆる手を打つというような発表でもして、市場の心理が安定するのを見て、ということでしょうね。

【原田】 そうですね。よほど思い切つたことをしないと。

【中島】 もちろんそうです。

【原田】 閉めるということは、誰も考えつかないほど大胆な施策を打つということとセットですね。

【中島】 ですよ。そのときは、今の金融対策という作文なんかじゃなくて、もう少し今までなかつたような……。

【原田】 昔やつた山一への特融とかいうようなことでしょうか。

【中島】 それに近いことを考えられたでしょうね。

【原田】 穿つた見方かもしれませんが、総理に言われて少し動いた方によると、すぐに諦められてしまつた。いや、総理なんだから自分でやればいいじゃないかと思つて、非常に徒労感が残つたというような証言をしている方もいらつしやいます。

【中島】 あの人は割り切りが早いというか、確かに、そういうふうにあくまでというところはないですね。そういうところはちよつとあつさりしたところもあるんです。ただ、自分の考えというか信念というのとは強固なものがあつて、そう簡単には曲げない人でした。

【原田】 経団連も日経連も銀行の経営者も、当時みんなが大反対でしたから、それで諦めたということでしょうか。

【中島】 というか、また、幸か不幸か株が上がつてしまいましたからね。これはそういう前提を置いてもしようがないけれど、もし、大蔵省のあの紙とか政府で決めたあの紙が効果を上げなければ

ば、もっと違った経済政策の展開が行われたかもしれない。そのほうが結果的にバブル崩壊に対する政策が早かったのかもしれないですね。これは何とも言えない。

幸か不幸かというのはそういう言い方であって、株価がぐうっと回復したのは幸いのように見えましたけれども、長い目で見ると、本格的な政策の出勤が遅れたという意味では、上がってしまったのがかえって不幸だったのかもしれない、という気持ちはちよっと残りますね。

宮澤さん自身が書いていらつしやる「私の履歴書」(2006年4月1日〜30日、日本経済新聞朝刊)とか何かでも、あっさりしているんですね。結果として不良債権処理が遅れてしまったと言うけれども、それは自分が頑張らなかつたからというのではなくて、周辺のそういう空気に流されてしまつてこうなつてしまつたな、という言い方です。

【竹中】 そうですね、評論家的なところがありますね。

【中島】 そういうところがありましたね、あの方は。

【竹中】 そこまで危機感を持っているなら中央突破すればよかつたじゃないか、と言う人もいます。

【中島】 ただし、危機感があつても現象的には株価が戻つていったから。

【竹中】 株価が宮澤総理の危機感のもとだったということでしょうか。

【中島】 株価が一つの指標ですよ。でも、株価が戻つても、不良債権についての危機感を持ち続けたことは軽井沢セミナーでおつしやつた通り。だから、本当はそのお気持ちがあつたのだからうけ

ど、その後の株価の推移の中で、宮澤総理が本当にお持ちだった危機感がだんだん薄れてしまつたというか、紛れてしまつたということだろうと思います。

【竹中】 それから、これも日経新聞に書いてあることですが、このころ宮澤総理は日銀総裁の三重野さんと頻繁に連絡を取り合つていて、三重野総裁は「いつでも日銀のポケットからカネを出せるようにしてある」とおつしやつていたということです。

【中島】 電話の前身まで私は承知していませんが、三重野さんとはもちろん電話をされていました。まあ日銀総裁と総理が連絡するのは当たり前のごとで、それはやっていました。三重野さんがそこで何を約束されたかまではわからないけれども、日銀特融みたいなものが選択肢の中にあつたことは事実だと思います。いざ本当にそれが現実の政策となつたときにその方法がとられたかどうか、それはわかりませんがね。財投の金を使う手もあるわけだし、いろいろあるわけだから。

【竹中】 経済産業省でも同じような研究会をやつたことがあつて、そこで研究者のあいだでさんざん疑問として出されたのは、総理は危機感をどういうかたちで認識されたのだろうということでした。それは、フィナンシャルタイムズや「エコノミスト」を読んだりされて、経済のそういう詳しい情報を自分で集めておられていたということでしょうか。

【中島】 フィナンシャルタイムズなどはいつも読んでいましたから、そういうことだと思えます。総理に対して、「これは危ないですよ」ということを誰かが説明するということはなかつたから。もちろん長銀に親しいご友人がいらして、その人はよく一緒にゴルフ

したり何かしていたから、意見交換はしていたかもしれない。ほかにも金融界に親しい人はいました。だけど、総理に「日本の経済はいま本当に危ないですよ」ということを直接的に説明する人はいなかったと私は思います。

【原田】 総理は、経済を問題にされていたのか、不良債権を問題にされていたのか、株式市場を問題にされていたのか。

【中島】 それは全部……。

【原田】 問題の根幹は不良債権から来ていて、不良債権があれば株も下がるし、また、株が下がると、含みがなくなつて不良債権の処理もできなくなります。

【中島】 そう、悪循環が起こつて、経済が非常に打撃を受けるだろうと。

【原田】 そうしますと、不良債権と株に非常に関心を持っておられたということですね。

【中島】 その通りです。総理は株の動向にはいつも非常に神経を尖らせていて、私は秘書官の一つの役割として株と為替の動きはいつもお耳に入れるようにしていました。総理がそれを求められたからでもあります。株と為替は一つのサインですよ。一日一日の短期的な動きでどうということはないけれども、その趨勢を見ながら、やっぱり危ないというご判断があったのではないのでしょうか。

【原田】 そうしますと、株が持ち直しているあいだに不良債権の処理を早くするよという問題意識は持っておられていましたか。

【中島】 それはもちろんそうです。

【原田】 そういふご指示も具体的にありましたか。

【中島】 それは当然ですね。大蔵省としても、不良債権の処理を急

がなければいけないという意識は当然ありましたから。だからあの方針になったわけですね。しかし、それは総理から見ればまだるっこしかったのでしょうか。「奇妙な文章だ」なんて後で言われていましてからね（笑）。

【原田】 文章のてにをはを総理が直されたという話もあります。直された方は、総理が気に入らないというのだから、何かものすごく大きなことを言われるのかと思つたら、てにをはを直されてがっかりしたとか意外だった、というようなことを言われていました。

【中島】 いや、てにをはを直すというのは、今この事態では大筋仕方がない。みんなが考えてくれているこの案に1回乗ってみよう、ということですよ。てにをはを直すというのは些末な話で、どうでもいいことです。要するに、ご自分の信念とはちよつと違っているけれどやむを得ないか、というようなことです。ですから、てにをはは確かに言ったかもしれない。だけどそれは本質的な話とは全く関係ない。

【原田】 マスコミ的には、不良債権の処理について、政府は先送りを許していたし、銀行もしなかつたと非難されています。総理も含めて政府の主観的な考えとしては、銀行に不良債権処理を早く処理するように非常に強く誘導していたのに、聞いてくれなかつた、というお感じはありますか。

【中島】 そうですね、あります。それは、大蔵省なり当時の金融界が、長いあいだの政策がうまくいっていったから、その延長でしか物を発想できなかったことの限界かと思えます。日銀もその深刻さに気づいていなかったわけです、当時。三重野さんは特融でも何

でもやりますよとおっしゃったけれども、日銀全体としては、不良債権が大きくなってパブルの崩壊に深刻な打撃を与えるだろう、というそこまでの真剣さはなかったと思いますね。

【原田】 不良債権の額については、大蔵省も92年（10月30日）に12兆円と数字を公表していますが、『金融行政の当面の運営方針』の実施状況についてで、都銀・長信銀・信託銀の6カ月以上延滞債権は12・3兆円と公表)、日銀が10兆円というような話ではないと盛んに大蔵省に説明していたという証言もあります。

【中島】 まあ、よくわからない。

【原田】 それは後知恵で、日銀が一つの考えとして言っていたことを、あとから深刻に考えていたかのように言っているだけだった可能性が強いでしょうか。

【中島】 私はそう思いますね。日銀が本当に当時の不良債権問題を深刻に受け止めて、それでそれを三重野さんから宮澤総理に言っていたとは到底思えない。

【竹中】 そうですか。これも西野さんの本に出ていることですが、92年7月に寺村さんが銀行局長になられるわけですが、そのときに福井（俊彦日銀筆頭理事）さんが面会を求めて、マンツーマンの会談を設けられた。そこで福井さんが寺村さんに、日銀の見積もりでは不良債権額は40〜50兆円あるとおっしゃったと。

【中島】 私はその真偽のほどはよくわからない。福井さんが寺村さんにそれを言ったというんですか。だけど、その話は寺村さんから総理には上がっていないですね。

## 官邸と大蔵省の関係

【竹中】 それに関連してもう一つお伺いしたいのですが、官邸から各省に指示を出そうとする場合、仕事の仕方として、大蔵大臣に指示を出してそれで処理するという形なのか、それとも銀行局長を直接呼びつけるという形になるのか、その辺はどうですか。

【中島】 人によってもケースによっても違うんですけどね。担当大臣を全く無視することはありませんが、担当大臣が来て話がちよつとうまくいかないことがありますよ、十分ご理解いただけないこともあるだろうから。だから担当局長を呼ぶケースはもちろんあります。しばしばあります。でも、本件についてこのときに銀行局長や何かを呼んだということではなかったように思います。

【竹中】 それもまたちよつと疑問なんです。もしそんなに不良債権あるいは証券市場について危機感を総理がお持ちであるなら、別にこの8月でなくてもいいんですが……。どういう行政スタイルなのかなのというのがちよつと疑問なんです。

【中島】 もちろん総理官邸には、当時は、宮澤内閣だけでなく、各省の局長、次官がしばしばレクチャーと称してご説明に来る。これは当時の風習として当然のことでした。そして、それを段取りするのが秘書官の一つの役割でした。各省大臣には、並行して、場合によっては事後的に報告して齟齬のないようにする、ということとはしばしばあったことです。

【竹中】 ただ、そういうなかで、寺村局長あるいは証券局長が、小川（是）さんではないかと思いますが、呼び込まれたことは特にありませんでしたか。

**【中島】** よく覚えていません、残念ながら。日高壮平氏は総務審議官で、大蔵省の政策全体を取りまとめるポストだったし、かつての自分の秘書官でしたから、彼は来たことがあったように思いますけれどね。当時の状況からすると、銀行局長も証券局長も、今本当にこういう危機的な状況ですという説明をしたかどうかは、私は個人的には非常に疑問だと思います。

**【竹中】** 何とか、中で、自分（大蔵省）のところで処理しようということだったのではないかと。

**【中島】** そうなんです。

**【竹中】** インタビュアーがそういう感想を言っただけではないのです。

**【中島】** そういう気運が強かったと思います。というのは、大蔵省は何も本当に事態の深刻さを知って隠そうとしたのではなくて、大蔵省自身の認識がそうだったということですよ。つまり、その深刻さの受け止め方が総理とは違った。大蔵省も当然事態を真剣に考えて、いろいろ対策を考えていましたが公的資金の投入までしなくても、そのうちに市場の自動的な反転があるだろうと思っていましたね、基本的に、当時。

**【竹中】** 株についてはどうですか。

**【中島】** そうです。

**【竹中】** 不良債権についてはどうですか。

**【中島】** 不良債権は確かにかなり大きいかもしれないけれど、それも経済の回復の中で解決していくだろう。例えば地価も戻るだろう、という意識が非常に濃厚でした。

だから、本当をいうと、土地に対する総量規制みたいなものが

あったでしょう。あれは今振り返ってみると、日本経済がもんどり打ってひっくり返る原因だったと思います。だけど、当時そこまでの捉え方ができた人というのは非常に希有だったように思います。ちよつと残念なことですね、本当に。

どこかに書いてあったけれど、日銀の賀来（景英）という（調査）統計局長がいたでしょう。

**【原田】** 大和総研にも来ておられました。

**【中島】** そう。

**【原田】** 大和総研の副理事長でした。

**【中島】** 彼は私の竹馬の友なんです。昔からの親友です。彼もどこかで言っているように、当時の日銀の認識はそこまでではなかったと思いますね。

**【竹中】** 危機感がいまひとつ足りなかった。本当に危機感を持っていたら、総裁でも何でも動員して大蔵省にもつと突撃したのにと回顧されている方もいるようです。

**【中島】** そういうことです。全くそういうこと。だから、それはもう誰を責めるわけでもないんです。大きなそういう経済の変動の中で、渦中にいると本当にわからないんです。だってバブルの頃だって、本当にこのバブルが危ういということを真剣に考えた人は少なかったと思う。それと同じです。崩壊している過程でも、これは本当に重大な事態が進んでいるということについての鋭い洞察はなかなかできなかった。そのなかで宮澤総理は、海外の情勢などに目を通して、株価の動きなどを見て、非常に鋭い感覚をお持ちだったと思います。

## 金融緩和政策を考えなかったのか

【原田】 そのあと、どんどんデフレになってしまいました。デフレになれば、当然、資産価格も下落してしまいます。デフレにならないように、もっと早い時期に大胆な金融緩和をすれば資産価格も下がらないだろう。そういう発想はなかったのでしょうか。

宮澤総理は、バブルが起きていたときには、金融緩和を続けることに非常に熱心だったという証言もあります。財政政策についても当然ご関心があるわけですが、バブルが起きているときにも金融政策にもご関心があったので、バブル崩壊後、財政面だけでなく金融面からももっと大胆な金融緩和をすればデフレにならず、資産価格も持ち直すだろうという発想は、宮澤総理はお持ちではなかったのでしょうか。

【中島】 そこは私にはたぶん発言の資格がないんです。というのは、私は93年にはもう大蔵省に戻りまして、予算の仕事に没頭しておりましたから。

宮澤総理のお考えとしては、あの方ははっきりと成長論者ですから、ひよっとしたら今おっしゃったようなことを考えておられたかもしれない。しかし、そこは確認したわけじゃありません。ただ、あの方は常に成長論者でしたよ、本当に。ですから、公共投資にもいつも熱心だった。

それで、国債の発行なんかについていうと、大蔵省は非常に神経を尖らせて少しでも抑えようとしていたけれど、その点宮澤総理はいつも比較的緩やかでした。私は、だから、国債発行を抑えるという話については総理とちよっと意見が違ったけれども、一生懸命申

し上げたことはあります。

【竹中】 でも、当時日銀は、公定歩合を何次にもわたって引き下げていた時期ですから、いちおう金融緩和路線ということだったのではないですか。

【中島】 そう、かなりのスピードで下がりましたからね。それはこんなものかと思っていたかもしれない。

【原田】 現在の金融危機に対して、世界中の中央銀行、特にアメリカは非常に大胆な金融緩和をしているわけです。

【中島】 そうですね。

【原田】 それはむしろ日本が失敗したからアメリカが今やれるわけで、当時の日本としてみれば、普通にやっている和金融政策当局は思っていたというのには、そうかもしれないですね。

【中島】 そう思いますね。ただ、見てみると、アメリカのほうがやることは大胆ですね。S & Lの処理なんかもそうでしょう。ああいうようなことも日本はもっと大胆にやればよかったと思うのは幾つもあると思います。後になって、都市銀行などにもドーンと公的資金を入れたりいぶん大胆になってきたけれども、やはりちよっと後手に回ったような気がします。住専の問題などで公的資金を入れることが許されるような雰囲気になってきて、だんだん行ったわけですね。

## 自民党セミナーでの「公的援助」発言

(1992年8月30日)

【竹中】 8月17日の軽井沢で思いとどまっていたのだと、株価

はいちおう反転するわけですが、それでも今おっしゃったように、宮澤総理は依然として危機感をお持ちになっていたのは間違いないと思います。それで8月30日に自民党のセミナーで、「必要ならば公的援助をすることもやぶさかではない」と発言されました。

【中島】二つ意味があります。いちおう株価も持ち直したから、これで何とかなったのかなというお気持ちもありながら、不良債権は簡単には終わらないよという本当の意味の心配があったでしょう。もう一つは、総理がそういう発言をすることによって、市場が安心して、また株価にも良い影響が出ることを期待された可能性もありますね。

【竹中】 いざとなれば政府が出てくると。

【中島】 そう。そういうふうを意識されたかどうかは別として、自分の発言が市場に対してプラスのメッセージになればいいなお気持ちにはあった可能性があります。

【竹中】 この「公的援助」という発言をされたとき、大蔵省のリアクションで何か印象に残っていることはありますか。

【中島】 総理がまたとんでもないことを言い出したということで、私はずいぶんお叱りを受けました(笑)。「おまえ、何をやっているんだ」ということでしよう。まあ、しかしそれは仕方がないことです。私は総理の真剣さを間近に拝見していたから、むしろ敬意を表しました。

大蔵省が言っていることは一応正論ではあったんです。だけど本当にどこまで深く考えての正論か、今考えてみると、とりあえず現状……。

【竹中】 このとき、大蔵省は、「ああ、言っちゃったのか。あれだ

け言わないでと言っていたのに、案外簡単に言っちゃったんだな」と言って、「公的資金はやっぱり入れません」という想定問答を書いていきます。それを中島秘書官から宮澤総理に見せたら、総理は「別に大蔵省に何かしてもらいたいわけじゃないんだ」と発言されたというの、これもまた西野さんの本に書いてあります。

【中島】 (笑) 総理はとにかく市場に何かメッセージを送りたいということで発言したのであって、「具体的に君たちに何かやってくれ」という意味で言ったんじゃないよ」と。

【竹中】 そういうことですね。

【中島】 そういうことです。

【竹中】 「公的援助」の意味というのは、やはり多義的というか、あいまいというか、財投もあれば、日銀特融もあれば……。

【中島】 そう思います。私もそれはちよつと十分ね、どういう公的資金を入れましょうかというところまであえて踏み込まなかったわけです。それは当時どんなかたちにせよタブーだったから。ただ、総理が考えられたのは、日銀の金か財投の金でしょう。一般会計でやるなんていうことはないでしょうからね。

【竹中】 一般会計までは考えていなかったでしょうね。

【中島】 想像ですけども、それは考えていなかったと思います。できっこないと思います。

【原田】 92年であれば、ふくみもあつたわけですから、銀行部門全体としては自分でできると考えるのが普通だと思えます。

【中島】 普通でしようし、主要銀行の人たちも皆そう思っていましたよ。

【原田】 そうですね。国がお金を出せば、刑事責任なんていうこと

はあり得ないにしても、ある程度は経営責任があるということになると思います。ですから反対するのは当然です。もし総理が早く始末をつけたのであれば、会計制度をきちんとして早くやらざるを得ないようにする、というのが正論と思います。

【中島】 まあ、それもあつたかなあ。

【原田】 そういうのも後知恵でしょうか。

【中島】 何しろ、資金を出すと、それを受け入れるのは、資本市場それ自体でなければ、金融機関が何かの金を受け入れるということだけだと、そのときは金融機関が受け入れノードなんだから。

【原田】 そうですね。

【中島】 そうでしょうか？だから、やっぱりなかなか進められなかったということがありますね。総理一人だけが鋭く認識していて、洞察力があつても、それを受け入れる相手側がそこまでの意識になつていなければ、結局は難しかったですね。しかも、大蔵省もそういった世間全体の常識の範囲を超えることはできなかった。だから、非常に深刻な事態が進んでいるところまでの認識がなかったということで、結局、なるべく現状を守って市場の自然の反転を待つというのが、当時のものすごく強い濃厚な空気でした。

## 金融危機の認識

【原田】 大蔵省の方の中にも、別に40兆の不良債権で済むなら、端のほうの銀行はつぶれるだろうけれども、それは金融自由化を決めた時点で覚悟していたことであつて、主要21行のかんりの部分で破綻するというようなことはあり得ない。だから、むしろ、銀行破綻

は97年以降の不況で起きたことであつて、92〜93年の時点での危機に対する認識としては正しかった。つまり、危機だけでも、それほど危機ではないという見方で正しかったという方もいらつしやいます。

【中島】 それは、金融のプロが見ればそういう見方もあるのかもしれません。そこまでは私もちよつとよくわかりませんね。それは、日銀のほうの系統の方がおっしゃったんですか。

【原田】 大蔵省の方がそういう考え方ですね。

【中島】 うーん。

【竹中】 92年というのは、社会的にまだバブルの余韻が色濃く残っていましたからね。

【原田】 そうですね。いろいろ穿つたことをおっしゃる方はいらつしゃつて、長信銀が非常に深刻であつて、その深刻さを総理が受け止めていたのではないかと説もあります。

【中島】 その長信銀というのは日本長期信用銀行、日長銀のことですか。

【原田】 そうです。

【中島】 まあそれも穿ち過ぎでしょうね。確かに日長銀に親しい人はいたけれど、何も日長銀だけを救おうなんて思つたわけじゃない。それから、例の後に出てくる日長銀の問題がありましたね。実をいうと私も個人的にずいぶんパッシングを受けた日長銀の事件。当時そんなものが認識されていたわけではありませんから。

【原田】 後知恵でいろいろなことをおっしゃっているに過ぎないのかも知れませんが。

【中島】 なんともここはね、当時も考えていたような気分になつ

ちやうかもしれないし、後知恵なのかもしれない。そこは誰しもはつきりしないと思うんですけどね。だから、本当に自分はどこまでの認識だったのかということ振り返るのは大変難しいと思うんです。自分はわかっていたんだと言いたいところだけれど、少なくとも私は十分理解していたとは言えない。それから、私の目から見て、大蔵省の担当部局もそこまでの認識をもっていたとはちょっと考えにくいですね。ともかくにもいろいろな手を尽くせば何とかなる。

【竹中】 92年当時はそうでしょうね。

【原田】 いずれにしても、お金を入れるなら全部吐き出してからだろう、というのが多くの方の常識だったと思います。その当時のことを考えてみれば、銀行はみんな、シャッターを閉めても5年ぐらい大丈夫だと言っていましたね。それだけ含みがあると。

【中島】 当時、銀行、特に大手銀行はまだ自信があったんですね。だから変なことをしないでくれということでしょう。一部実務家レベルでは住専処理に公的資金を求める声もあったようですが、富士銀行長老の松沢（卓二元頭取、当時相談役）さんなんか筆頭に、金融界全体の空気としては公的資金反対一色でした。

【竹中】 そうですね。こういう話の前提としては、経営者の方が責任を取らないということで処理を進めていくことをすれば、当然公的資金には反対ですし、大蔵省だってそんなことをしたら銀行局長の首が飛ぶという話になってしまいますからね。

【中島】 いやだったでしょうね。

【竹中】 本当に責任を取ることまで考えればそういう処理はできたかもしれませんが、そういうのはいちおう政策のオプション

には入ってこなかったと思います。議論の前提条件として、今いる人たちがそのまま残ったうえで問題をどう処理していくかということになるのではないかと。

ただ、宮澤総理はかなりあとの頃まで考えていらつしやったように、93年1月26日に参議院で、銀行のことをどう思っているかという代表質問に答えるかたちで、「自助努力が前提だが、国民経済的観点から支援すべきものは支援する」とまだおっしゃっています。ですから、総理の危機意識はやはりずっと続いていたということでしょうか。

【中島】 ずうつと続いていたと思います。それからもう一つは、そういうメッセージを発することによって市場を落ち着けたい、ということでしょう。

「それから、資産デフレ、これはもう金融機関が自分の責任で対処すべきものではないかということは、私は基本的にそう思います。金融機関の自助努力が基本であるということから、いわゆる共同債権買い取り機構が間もなく設立されるということ、また、各銀行が不良資産のデリスクロージヤを本年3月期に、出すことになっておりまして、基本的にはこれはおのおの金融機関等々が真剣な自助努力をいたすべき問題である。ただ、結果として銀行の融資能力が非常に落ちるといことは、言ってみれば、体の中を血が流れる、その血の流れが停滞をするというようなことでございますから、国民経済的な観点から支援すべきところは支援をする必要があると思っておりますけれども、基本的にはこれは自助努力の問題であると思います」

参議院本会議2号 1993(平成5)年1月26日  
注 国会議事録検索システム参照。

## 自民党内抗争と宮澤総理

**【竹中】** それから、92年8月に例の東京佐川急便事件というものが発覚して、金丸(信) 自民党副総裁がお辞めになったり、小沢(一郎)さんのグループと小淵さんのグループの間で竹下派の継承争いがあったて、自民党内は大騒動になります。

**【中島】** そうですね。

**【竹中】** そして、いよいよ竹下派がついに92年10月に分裂して、自民党内抗争が本格化していきます。そうなると、もう宮澤総理も自分の足もとに火がついている状況で、経済政策を考えていく余裕がなくなっていかれたのか、あるいはそういうことはあまり関係ないでしょうか。

**【中島】** あまり関係ないと思います。つまり宮澤総理は、経済運営や何かについてはものすごく真剣な関心を持っている。政治的なそういう抗争には、もちろん巻き込まれざるを得ないけれども、そもそもお好きでないし、そういうことは誰かがやってくればいいと。自分で政治状況をどうするとうようなことは本当に少ない人でした。簡単にいえば、政治的な駆け引きとか権謀術数が嫌いな方でした。やらない。それが政治家としてはひよつとしたら欠陥だったかもしれません。

**【竹中】** 党内で起きていることが経済政策に影響することは特になかった、ということでしょうか。

**【中島】** 特にはなかったと思います。それは党内でいろいろあつて、そういう話は当然いろいろ入ってきます。だけど、その種の話は、彼は非常にクールに距離を置いて見ていた。これはちよつと本件とは離れるからできればオフレコにしてほしいけれど、あの方は政治が嫌いなんですよ、はつきり言つて(笑)。

**【竹中】** よくそういうことは言われますよね。

**【中島】** それは横にいてわかります。そういう金丸さんがどうしたとか何とかというのは、言い過ぎかもしれないけれど、気分としてはどうでもいいことなのです。それよりもつと国の政策を俺はやるんだみたいな感じがあつて、ちよつと超越していました。それは本当はよくないんですよ。宮澤政権を短命に終わらせた原因でもあつたから、政治家としてはそういうところが私は残念だつたと思うんです。でも、そういう政治のどろどろした世界の話はお好きではなかつた。自分からそこに積極的に関与して打開していこうとうような動きも、あまりされなかつた。

**【竹中】** 逆にそれがあつたからといって、今はこういう状況だから公的資金のことなど言つたらまずいなと考えるととうようなこともない、ということですか。

**【中島】** ない。

**【竹中】** なるほど。(笑)

**【原田】** 政治家に期待するのが無理なことかもしれないませんが、不良債権処理をするうえで一番大事なのは、私は会計制度だと思えます。ですから、不良債権を処理せざるを得ない会計制度にすれば、処理をすることになった。

**【中島】** よかつたでしょうね。だけど、それは緊急にそういうもの

ができあがって功を奏するわけではないから。

【原田】 総理にもそういう発想はないわけですね。

【中島】 そうですね……。

【原田】 役人にも、そういうことを進言する人はいなかったということですか。

【中島】 とりあえずは当面の話ばかりでしたね。総理は不良債権を処理するには、銀行局を通じてやるしかないのですが、銀行局のレクチャーを聞いて納得するという心境には到底ならなかったと思う。

【竹中】 今の通説というのも変ですが、通説では、「金融行政の当面の指針」は、当時の銀行局が考えて、土田〔正顕〕前局長のアドバイスも受け入れながら……。

【中島】 それは、その通りですが、証券局もあるでしょう。だからまとめたのは、総務審の役割だったかもしれません。日高さんは軽井沢からの帰りの電話のやりとりでは総理の立場も考えてできるだけのことを盛り込むように努力してくれました。

【竹中】 そうですか。では、これは銀行局長と証券局長と総務審議官が……。

【中島】 がもちろん共同してやった。

【竹中】 篠沢さんは官房長ですよ。こういう話にはやはり官房が関与していますか。

【中島】 当然です。

【竹中】 当然ですか。

【中島】 当時私が電話したのは、もちろん銀行局、証券局もありましたけども、一番時間をかけたのは篠沢さんと日高さんだったよう

な気がします。

### 宮澤総理と三重野日銀総裁

【原田】 三重野さんが公的資金の投入に対して熱心だったとか、宮澤総理に対して協力的だったということですが、三重野さんはバブルつぶしにも熱心だったわけですね。バブルつぶしに熱心だった人が、むしろ熱心だったからこそ、後で、つぶし過ぎたかなと思って宮澤総理の危機感にある程度反応したということなのでしょうか。

【中島】 それは、今おっしゃったような解釈をするとなんとなくわかるような気になりますが、なんとも言えませんね。当時既に、バブルつぶしをやって、「しまった」というお気持ちをはたしてあったのかどうか、それもわからないなあ。僕は今振り返ってみれば、バブルがあんなふうに急激に崩壊していったのは、確かに三重野さんの方針が大きかったと思いますが、当時、三重野さんがそういういた認識を持っておられたかどうか、私はそこまではわからない。

【原田】 そう思っていないのだったら、「総理、そんなに危機感をお持ちにならなくても大丈夫ですよ」と説得するのが普通だと思いませんか。

【中島】 「いつでも金を用意していますよ」とまでは言いませんよね、普通は。そうかもしれません。

【原田】 だから、やはりまずいと思われたのかなと思ったわけです。宮澤さんとの話が本当にどれだけ具体的になっていたのかもよくわかりませんが。

【中島】 そうですね。三重野さんと特別にもすごく親しいというほどではなかったと思うんです。普通の信頼できる総裁という感じだったと思うんですね。だから、本当にそこまで深い議論があったのかどうかは、私は残念ながら承知していません。ただ、要するに宮澤総理の気持ちを含んでまっとうな議論の相手をしてくれる人は、当時金融界には殆どいなかったと思います。

【竹中】 金融界にはいなかった。そして銀行局もそういう感じではないと。

【中島】 そうですね。それは宮澤さんが初めから相手にしなかったと言っとちよつと語弊がありますが、当時の大蔵省のスタンスからすれば、宮澤さんの意を汲んで、意を体して何かやるという姿勢ではもちろんないですね。

【竹中】 そうすると総理はどなたにも相談なさらなかったということですかね。

【中島】 うーん。総理のもとにいくつかの意見や提言が来なかったわけではありませんが、総理が相談していたとは思えません。

【竹中】 浜田卓二郎（当時自民党代議士、宏池会所属、元大蔵省主計局主査）先生が結構情報を入れていたという説もあります。

【中島】 一生懸命通っているいろいろな情報を入れてくれましたが、彼がそこまでの政策的なレクチャーをしたのかどうか私にはわかりません。確かに彼は、いろいろな政策問題を持ってきたり、党内の空気は今こうですよとか、そんな話はよく持ってきましたね。

## グリーンスパンの宮澤首相評価

【中島】 話は変わりますが、これはいつのかな、「アラン・グリーンズパン（元FRB議長）が「私の履歴書」で、日本とのつき合いの中で一番信頼していた印象深い日本人は宮澤さんだと書いているんです（2008年1月29日、日本経済新聞朝刊）。つまり、やっぱり宮澤さんが世界で起きていることを非常によく理解している。「G7の大半の参加メンバーよりも明らかに数歩抜け出していた」とグリーンズパンが評価しています。

【竹中】 さすがですね。それは、小淵（恵三）内閣で大蔵大臣になって以来の話でしょうか。

【中島】 これ、なんならコピーしましょうか。僕はこれを読んで嬉しかったのでとっているんです。

【竹中】 ぜひ。

【中島】 （コピーを全員に配付）しかし、これを見ると、そのあとにもちよつと興味深いことが書いてありますね。私、読むのが久しぶりで気がつかなくなりましたが、1段目に「個人として最も印象深い日本人は宮澤喜一元首相だ」とありますね。そのあとを読むと、両者は不良債権の議論をしています。

「宮澤元蔵相との会話でよく覚えてるのは、邦銀の不良債権問題を巡る議論だ。80年代末に米国も同様の問題に直面したが、私はその時の解決法を詳しく説明した。整理した貯蓄金融機関の担保不動産を整理信託会社（RTC）が安値で売り、不動産市場を動かしたことで、米国では問題を早期に解決した。宮澤元蔵相は辛抱強く、笑みを浮かべながら聞いていたが、最後に「それは日本のやり方で

はない」と言った。金融機関の破綻や多くの失業者を生むことを意味するからだ、と。」

【原田】 「それは日本のやり方ではない」とは、宮澤総理は、資産を流動化することを考えておられなかったということですね。

【中島】 金融機関を破綻させないということでしょう。この部分がどういう意味なのか私も正確には理解できませんが、とにかくグリーンズパンが宮澤さんの経済情勢、世界情勢を見る洞察力を非常に評価してくれているということですね。

### 首相秘書官任期終了後

【中島】 私が2年の首相秘書官任期を経て大蔵省に戻ったときは予算担当になりました、そのとき例の国民福祉税問題があったりなんかしたんですが、特に主計局長2年目は阪神・淡路大震災がありました。その緊急対策を私が公共事業担当の責任者として取りまとめをやりまして、そういう方面に忙殺されていました。ですから、金融関係でということが進行していたかについての記憶は残念ながらほとんどありません。本予算編成に続いてすぐに補正予算でしたから、それにつかまっていた。それからウルグアイ・ラウンドもあつたんです。あれも私が担当しましたから。

【竹中】 6兆円の対策費ですか。

【中島】 そうですね。あれについてもかなり激しいやりとりがありました。もともと10兆円の要求があつたんです。それを結局ずいぶん抑えたんです。私が「納税者の納得が得られない予算はつけられない」と発言したら、国会その他でだいたいやられました、当時はね

(笑)。そんなことでした。

そのあととはご承知のように、私自身が、自分の脇の甘さということもあるんだけど、不徳の致すところで例のスキヤンダルに巻き込まれましたから、皆様にご迷惑をかけ、非常に不本意なかたちで大蔵省を去りました。ただし、総理との関係はずっと続いています。折に触れてお目にかかる機会がありました。それは大変ありがたいかった、私にとっては嬉しかった。心の支えでしたよ。

私がちよっとアメリカに行つてから戻ったときに、稲盛(和夫)さんから声を掛けられて京セラに行くことになったと報告したときも、喜んで1時間以上しゃべっていましたね。そのあと私はまた船井電機というところに移るんですが、そういう節目節目に総理をお訪ねしていました。私が、大蔵省を非常に残念なかたちで去つたものだから、総理は心配してくれていたということもありますね。これは本件とは全く関係ない個人的なことですけど。

### 宮澤総理の横顔

【竹中】 首相在任中、総理は経済がほとんどのご関心ですか。

【中島】 そうです(笑)。

【竹中】 外交は……。

【中島】 ああ、それは外交ももちろんです。グリーンズパンさんとも書いてるように、どこの外国の人が来ても宮澤総理は、公式のものはもちろん通訳を通じますけれど、そうでないときは英語でやりとりするんですが、ものすごく迫力があるんです、びっくりするほど。日本の国会での答弁とかあんなものじゃないんです。本当にす

「ごい。それは宮澤さんの隠れた一面でしたな。英語でやったときのほうがはるかに鋭い。鋭いというかはつきりしてました。」

「あの方は、ゴルフでもものすごい攻めのゴルフなんです。全然弱気ではないの。池があるから回っていかう、なんてしないんです。必ずもうガンと打っていく。それで見かけによらず非常にうまいんです。だから、実をいうと信念が強く攻めの人だった。」

ところが、政治的な駆け引きとかそういうのが本当にお好きでなかった。だから、そういう意味では政治家に本当に向いてはおられないなかつたかもしれない。政治のどろどろしたときの話があまり好きではないんです。

人間的にはものすごく尊敬できる人だと私は思っています。その教養の深さも並大抵ではないんです。特に中国の古典、それからもちろん欧米の文学から詩から哲学から、誰もかなわないの、本当に。それを基礎に政治について言うんだけど、自分がその渦中にありながら、しばしばやや高いところから客観的に見ているから（笑）。

【原田】 客観視してしまうから評論家的な発言になる、ということなのです。

【中島】 そうそう、そういうところがある。だから、とにかくしゃにむにこれだ、というような感じはないですね。自分は、小泉（純一郎元首相）さんのような、白馬にまたがって「ついてこい」と言うようなたぐいのリーダーではない。全体を見ながら進むリーダーだ、というような発言をしたことがあります。とにかく先頭に立って、「ついてこい」と言うようなリーダーもあるし、全軍の動きを見ながら駒を動かす人もいますよと。

「教養の深さとか、外国の人との交渉のときの信念の強さとか、これは本当にびっくりするような場面を何回も拝見しましたね。それが日本の政治の中で正しく評価されなかったという感じがあつて、とても残念です。総理の身近にいて宮澤さんの価値を一番よく知っていた人は、もちろん宏池会の人たちもそうだけれども、意外に私は河野洋平（元衆議院議長）さんだったような気がする。宮澤さんも河野さんが好きだったし、河野さんは心の底から宮澤さんを尊敬していましたね、本当に。だから、河野洋平さんのところに行つたら、もしかすると面白い話が聞けるかもしれない。」

本当に政治家らしからぬ総理でした。それが私にとつてはちょっと残念なんですけれどね。もう少し政治的な手腕があれば、宮澤さんの良さが発揮できたんじゃないかなという気がする。権力に対しても恬淡としているんです。

【竹中】 そういうことをおっしゃっていたらいいですね。権力者が権力をもってやるのはよろしくないという抑制的な考え方をお持ちだったと。

【中島】 そう。あの方は、それが本当に肌にしみていたと思う。うわべだけでそう言っているんじゃないくて、権力的なことをやるのが本当に好きじゃないんです。だから、逆にその辺のところ、言ってみれば、こういう経済危機の中で自分の説をどうしても何が何でも押し通す強さがなかった、ということなのかもしれない。そうですね。もし小泉さんみたいな強さがあれば、あのとときだつてもつと違つたことをやったかもしれない。

【竹中】 「閉めると言つたら絶対に閉めるんだ」と言つて閉めたでしょうね、たぶん。

【中島】それはやっぱり宮澤さんのお人柄ですね。

私もこのときのことを思い出すと、あとから考えてみると自身身の認識も十分でなかったように思うし、はたしてああいうことでよかつたのかなという気もします。総理の言うことをもつと強く尊重して、そのお気持ちの通りやつたほうがよかつたのかもしれないな、とふと思うんですけれどね。しかし、そういうことは今言っても仕方のない話で、当時の状況下ではやっぱりできなかったでしょう。

【竹中】実際に政治の話をする、東証を閉めるようなことを本当にする、とすれば、党サイドの自分の信頼できる人にもある程度話をしておかないと、いきなり官邸が暴走したとか、自民党からもワーツとすごい話が出てきますよね。

【中島】それはそうですね。そういうときは当然それこそ官房長官とかを使ってやることになるでしょうね。

だから、穿った見方をする人は、それほど真剣じゃなかつたんじゃないかなんて言うかもしれないけれど、それはあの方の諦めの良さと、権力を振りかざすのが好きではないところからくる印象ではないでしょうか。私は、信念は非常に強かつたように思います。

【原田】みんなが反対したらやめるということでは、あまり強い信念ではないような気もしてしまつたのですが。

【中島】だけど、「とりあえず1回この対策で見てください」と。総理を説得するんだから、大蔵省も真剣でしたからね。要するに公的資金を使う以外のその当時できることは、あの紙に精一杯盛り込んだんです。ある意味で真剣勝負だったんです。それで、なおか

つ、市場が動かないあるいはさらに悪化すれば、どういう事態になつたかな。総理のおっしゃることが現実化したかもしれないという気がしますね。

総理も、株価が戻つちやつたので、なんとなくそれでよかつたのかなという気分になつてしまつたということでしょう。でも、私の解釈は正確でないかもしれません。

### 「市場を閉める」発言の前後

【原田】でも、実際に一番身近でご覧になられていた方ですから。

【竹中】身近でご覧になつていて、軽井沢で実際にどういうやりとりが行われたかというのは……。

【中島】本当にねえ。まあ、つらかつたですよ、私もね。

【竹中】そういう（総理が東京に戻つて東証を閉めるかも知れないという）話が最初にあつて、軽井沢に行かれたわけですね。「金融行政の当面の運営方針」を説明するために行かれたわけではないですね。

【中島】もちろん説明するために行つただけだと、最初に総理がすごい危機意識をもつて、市場を閉めても、というメッセージが来たんです。そういうことをさせては大変だと思つて、そこで持つて行つた。私の記憶ではそうですね。

【竹中】どういう経緯でそうなつたのか、というのはわかりました。

【中島】ただ、本当に正式な発言として総理が「市場を閉める」なんてことを言つたわけではもちろんありませんが、それくらいを決

意で、自分はもう東京に戻るんだというメッセージが届いたからこそ吹っ飛んでいったんです。

【竹中】 「市場を閉める」という発言は……。

【中島】 うーん、そうなんですよ、 「市場を閉めることも」……。そういう話がいろいろと報道されているでしょう。それを読んで違和感を覚えないのは、やはりそういう発言があったんですよ。表向きというよりも。ちよつとどうかちだつたのか、そこが本当に肝心なところなんだけど、私も正確に思い出せないんですが、「自分は軽井沢から戻ってもいい。これ以上株式市場が下がるようだったら、いったん閉めてもいいんじゃないか」というようなメッセージを私が受け、それを大蔵省に伝えたいと思います。新聞記者に言ったわけじゃないですよ。

【竹中】 新聞記者はたぶん、もつとあとの00年ぐらいになってそういうことを……。

【中島】 総理はそれぐらいのことを考えるんですよ。

【竹中】 92年に考えたわけですね。それでそれを中島秘書官にお伝えになった。

【中島】 それぐらいのこともやる必要があるのではないか、ということに対して、大蔵省が必死になってそれをとめた。

【竹中】 わかりました。それで、おそらくその情報が共有されたのは官房筋なんですね。

【中島】 そうです。

【竹中】 わかりました。どうも大変ありがとうございました。

【原田】 貴重なお話を大変ありがとうございました。